世田谷稲門会会報

ホームページURL：http://setagayatou.mond.jp/

令和3(2021)年4月23日
第　76　号
発　行　世田谷稲門会
発行人　旭　　正　勝
編　集　榎　並　俊　一
　　秋　山　多　美　子
　　兼　子　信　子
　　大　内　秀　行
　　若　林　昭　男
　　鷲　巣　俊　子

事務局　〒157-0062
世田谷区南烏山5-4-10-4F
TEL/FAX 03-5384-2435
戸田　昇（とだ　のぼる）

第30回定時総会は　書面開催に変更

第30回定時総会は令和3年6月5日(土)11時より、青山のアイビーホールにて開催予定でしたが、諸般の事情（後述）により実開催が困難となりました。

従いまして、書面による開催とさせていただきます。

本会報に同封されている第30回定時総会議案書をお読みいただき、同封の返信ハガキにお名前と各議案への「賛成・反対」のいずれかに○印を記入いただき、5月末日までに必ず返送をお願いいたします。なお、○印がない場合には議長（会長）に一任されたものと解釈させていただきます。

【書面開催となった理由】

① 早稲田大学校友会から書面にて通達があり、3月末までの活動自粛期間を5月末まで延長するとのこと。また6月以降も不透明であること。

② 開催場所として予定していた青山のアイビーホールが3月末閉館となることが分かり、代替施設を確保することが困難なこと。

新年度の活動に向けて

世田谷稲門会会長　旭　　正　勝

昨年度は新型コロナウイルス感染防止のため、あらゆる活動を自粛せねばならぬ辛い一年でした。メール書面やZoomでのオンライン活動を頼りに、会の運営を継続することしか出来ず誠に無念です。

このような状況ではありましたが、大学及び校友会から要請のあった学生支援の為の寄付活動では多大な協力をすることが出来ました。世田谷稲門会は会からの寄付金20万円に加え、会員各位からの個人寄付金が昨年10月時点で既に200万円を超えたとの報告を受けております。

令和3年度は感染防止対策に留意しながらも、可能な限り従来の活動が復活出来るよう努力して参ります。そして当会の魅力度を更に向上させるような活動も模索して参りますので、皆様も是非ご意見、アイデアをお寄せいただきたくお願い致します。

一日も早く、皆様と共に楽しい会合が持てますよう心より祈念しております。

会員の「自由投稿」大特集 !!

76号、77号では、会員の皆さんの紹介を兼ねて、「自由投稿」を特集します。76号では7つのブロック会から各2名ずつと趣味の部会の2部会からの投稿を掲載させていただきました。次号(77号)では趣味の部会の皆さんからの投稿を掲載する予定です。お楽しみに。

（広報統括幹事　榎並　俊一）

ゴルフとビールと

松　浦　晋三郎（昭38政経、西北会）

昨年の1月23日に国内初の感染者が出た中国発の新型コロナウイルス、4月の第一波、8月頃の第二波、そして11月中旬以降の第三波の大波に襲われ、今日までその勢いは留まる気配を見せておりません。第2回目の緊急事態宣言も3月21日まで延長され、この会報が発行される頃にはどうなっているのか、全く予測がつきません。

今年7月・8月に延期された東京オリンピック、パラリンピックの開催も危惧されておりますが、何とか開催に漕ぎ着けてもらいたいものです。

1964年の東京オリンピックはサラリーマン生活の2年目でした。当時はマイナーなスポーツは今ほど人気がなく、チケットは容易に手に入り、駒沢でのレスリング、代々木でのバスケットボールを観戦した記憶があります。

真っ青な秋晴れの空を自衛隊のブルーインパルスが五色の五輪マークを華やかに描き、暫くして風に消えていったのを今でも鮮明に覚えております。57年前の秋でした。

思えば中国の天津より引き揚げてきたのが終戦の年、昭和20年の3月、4歳と6ヶ月の時でした。

7歳と6歳の兄、両親の5人で列車に乗り、命がけで朝鮮半島を釜山まで下り、船で下関港へやっとの思いでたどり着きました。船上から朝霧に煙る日本の山々を眺め、親子5人で手を繋いで「嗚呼これで日本に帰れた」と喜び合ったのを幼心に覚えております。途中何度も逸れかかったこともあったようですが、残留孤児にもならず誠に運が良かったと思っております。

昨年傘寿を迎えました。この年まで元気でゴルフの出来る幸せを噛み締めております。ゴルフと言えば、早稲田学報の「稲門だより」で世田谷稲門会ゴルフコンペが目に留まり、次回は中津川CCで開催とありました。さっそく高校から一緒のK君を誘い参加したのが世田谷稲門会との出会いでした。平成7年11月の第5回目コンペで、参加者は26名。因みに私が準優勝でK君はBBでした。以来、ゴルフ部会には大変お世話になっております。コロナ禍で昨年よりコンペが中止となっておりますが、早く収束してほしいものです。

疫病は永遠には続きません。必ず終わりが来ます。これは歴史が証明しております！　楽しくコンペが開催できる日を心待ちにしております。

それにしてもゴルフの後、仲間との反省会のビールは何であんなに美味しいのでしょうか。

変化はチャンス！

佐　藤　清　美（昭58政経、キャロット会）

初めてご一緒させていただいた渋谷ビアホールでの納涼会。世話人の方々はじめ、ご参加の皆様、とっても優しく、居心地良く。お初で、3次会まで飛び跳ねてしまいました。

キャロット会、青年部会、食べ歩き部会、ウォーキング部会、レディースクラブ…どの部会も世話人の方々、メンバーの方々、皆様素敵な方々ばかり。さすが、早稲田！さすが、世田谷稲門会！と、ありがたく思いました。行事には喜んで参加させていただき、感謝の気持ちでいっぱいです。が、「当たり前」が大きく変化。日々の生活が大きく変化。しかし「変化」は、チャンス！

お家が綺麗になりました！お料理に時間をかけるようになりました（気が向いた時ですが）！そして、何より、素晴らしいお時間が増えたんです！それは、3人の子供達とのステキ時間です！子育てが終わり、末娘も就職。自由時間が増える、と思っていた矢先の事です。

様々な制限があり、他にも気を配り、自身も気をつけながら、以前は目が向きづらかった国内めぐりや近場スポットに子供達と出かけるようになりました。映画やTDL（東京ディズニーランド）、USJ（ユニバーサルスタジオジャパン）、そしてゆっくーりなお食事。改めて、この子供達とのステキ時間は神様からのご褒美と、感謝いっぱいの日々です。

とはいえ、皆様とお会いしてお話したり、食べたり、飲んだり、共に過ごす、その素晴らしいお時間が早くこないかな!!と、本当にホントーに待ち望んでいる私です!!!

最後の早慶戦追憶記

保　倉　　進（昭25法、千歳会）

昭和18年10月16日(1943)戸塚元早大野球グランドで最後の試合が行われた。

同年10月1日、大学、高等学校、専門学校(旧制)文科系学生の徴兵制度が撤廃され、20才以上の文系学徒は徴兵検査を受け軍籍に入ることになった。当時の慶応義塾小泉信三塾長は「彼ら学生のための餞として野球をさせたいがどうだろうか」と早大野球部顧問飛田穂州氏に申し入れた。田中穂積総長は、戦況不穏時に敵性スポーツは不適当として許可しなかった。然し、法学部中村宗雄、野球部長外岡茂十郎両教授の必死の説得で、上記10月16日午後1時より試合決定、早大野球部員は塾長用特別室を用意したが、「学生と同じ席で結構」と新聞紙を敷き観戦された。エール交換、応援歌斉唱で試合は進んだが、結局10対1で早大の勝利となった。

然し、今回の試合は勝敗とは関係なく、選手や参加者全員「もうできないだろう『最後の早慶戦』」と思ったのだ。一般公開映画は、全員の校歌斉唱の場面で終わっているが実際はその後、スタンドの両学生の多くはグランドに躍り出て、互いの肩を組み両校応援歌「若き血」「紺碧の空」の大合唱となった。すると誰とはなしに「海ゆかば･･･」のゆっくりした音律の合唱がグランド全体に鳴り響いた。頬を涙で濡らす学生もいた(小生もその一人)。あれを体験した同輩は今は何人いるだろうか。年の経過と共に体験者が少なくなるのは寂しい限り。そして同年10月21日、神宮外苑球場で「出陣学徒壮行会」が行われている。

最後の早慶戦で活躍した近藤清君(レフト)は「神風特別攻撃隊」の一員として沖縄で敵艦に体当たり戦死(脚注)、心よりご冥福を祈るのみ。

(脚注)近藤清氏他3名は戦死／病死されている
(参考)遺品早大戦史資料館

コロナ禍の在宅勤務四苦八苦

岩　下　奈々絵（平13法、けやき会）

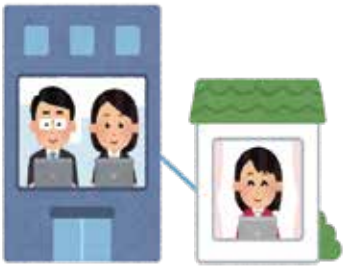
このたび「旬なトピックとして在宅勤務の状況など報告しては」と仰せつかり、このテーマで近況をご紹介したいと思います。

私が今の会社に転職したのは2019年3月。長年の都心勤務から、反対方向に2時間弱かけて通う日々(しかも始業が8:10)に疲れを感じ始めた頃、コロナ禍がやってきました。長距離通勤で感染リスクが高いとして、先陣をきって在宅利用OKとなったものの、苦労の連続でした。

会社にはもともと在宅の制度はありましたが、利用者は限られており、私が所属するグループでは皆無でした。通勤時間がなくなると喜んだのもつかの間、出社を前提とした業務での混乱、出社を続ける同僚とのコミュニケーションの難、そして何よりネットワーク環境が整っていたとはいいがたく、恐ろしく処理スピードが落ちて、通勤に充てていた4時間弱がそのまま残業時間に置き換わる有様でした。

その後、春の緊急事態宣言を受けてほぼ全員が在宅となる中で次第に環境が整備されていき、現在では初期の苦労はかなり解消されました。それとともに工夫？する余裕も出てきており、朝のメールチェックを時に歯磨きをしながらやる、運動と時間節約のため、昼休みに足踏みしながら新聞を読む、お茶を入れるついでに洗濯物も入れる(会社にはにらまれそう)、などなど。個人的には在宅だとオン/オフの切り替えができない、孤独を感じる、などという悩みとは無縁で、在宅をフル活用しています。

そして、稲門会の活動との関係でよかったことは、世話人会への出席可能日が増えたことです。けやき会の方々はお優しく、日程には十分配慮いただけているものの、出社すると平日は19時開始でも厳しい状況でした。ところが、世話人会開催日と在宅日を合わせることで、業務終了後そのまま室内を数歩移動して個人PCをつなぐ、という芸当が可能となり、その点でも在宅制度には感謝しなければというところです。



ジャズでチャリティー

浅　沼　　肇（昭40商、きぬた会）

57年前の東京オリンピックの時、早稲田大学ハイ・ソサエティ・オーケストラは、オリンピック選手村の中で演奏をしました。私がバンドマスターの時です。この時IOCブランデージ会長が、徹底したアマチュアリズムの人で「選手村の中での演奏もプロは駄目、アマチュアで」となり、ハイソがその任を担いました。選手村の中の広いエンターテインメントホールには、世界各国のメダリスト達が集まり、その華やかな雰囲気の中での演奏は忘れがたいものでした。

それから43年、早稲田大学創立125周年の時、校友会から昔のメンバーでの演奏を頼まれ、会社生活の定年を迎えたメンバーでバンドを再結成、大隈講堂で演奏しました。これを機に演奏活動を続けていた折り、2011年3月、東日本大震災が起りました。何か応援をと翌年から3月と10月に「東日本大震災チャリティーコンサート」を新宿のライブハウス「J」で開始しました。「J」のオーナー幸田君も早稲田卒です。

10月のチャリティーコンサートは稲門祭の前夜祭を兼ねていて、毎回早稲田学報に報じられていましたのでご存知の方も多いと思います。数年前には、露木茂先輩が歌手で参加された事もありました。

タモリも、チャリティーの主旨に賛同してノーギャラで3回も参加してくれました。写真はその時のもので、タモリが得意のスキャットを披露、その後ろで私が大笑いしながらギターを弾いています。好きなジャズで人助けになるのですから嬉しいですよね。2019年末までに16回開催し寄付は300万円以上になりました。

ところが、8年間続いたこのチャリティ・コンサートも、コロナ禍で2020年は中止になり、協力してくれたライブハウス「J」は経営難で41年の幕を閉じてしまいました。タモリの肩の後ろに「J」の文字が写っています。本当に残念です。私達は今、流れてしまったチャリティーコンサートの再開の可能性を模索しています。

早稲田の思い出

大　道　映　子（昭51教育、さくら会）

早稲田大学に入学した年、構内では痛ましい事件（脚注）が起こっていましたが、その頃、16号館の教育学部で過ごしていた私は、世間でその事件が大きく取り上げられているにもかかわらず、遠い世界の出来事のように受け止めていたと思います。6年間、カトリックの女子校に通っていたため、マンモス大学での新たな生活、友人という環境に慣れる事に必死で、情報を得る事がなく、今振り返ると、かなり緊張感のある時代に在籍していたのだとあらためて思います。

そのような中、私は友人と、いろいろな同好会に入ってみては辞めて…を繰り返し、結局、文学部のスロープ下にあった文芸サークルに参加する事になりました。なぜかと言いますと、私は教育学部理学科生物学専修でしたので、理科系の事は大学で勉強できるが、早稲田なら文学系も体験してみたいと思い、文系サークルに興味を持ったからです。部員の方々の読書量や文学的な知識の深さにはただ驚く一方でした。そこでは詩部会を立上げ、思い思いの詩を書いて小冊子を作り、学園祭で売ったこともありました。当時、大学には勉強しに行ったというより、友だちに会いに行くのが目的だったのですね。ご一緒に活動していたSさんとは本当に楽しい時間を過ごす事ができました。結婚や引っ越し等でその冊子、どこにいってしまったでしょうか？

こうして気楽に過ぎ去った私の学生時代、4年の卒研では試薬作りに大久保の理工学部に3ヵ月ほど出向することになりました。この体験も私にとっては素晴らしいもので、それをまとめた卒研レポートを、ご指導くださった櫻井英博先生が数十年間保存して下さっていたのですが、数年前に退官されるおり、希望者に返却して下さいました。湿式コピーで複写したものはほとんど文字が見えない状況でしたが、自分が作成したとはにわかに信じられないほど…様々な思い出が甦り、嬉しさの感動でいっぱいでした。

卒業後、足が遠のいていた母校ですが、コロナ禍が落ち着き機会があればまた訪ねてみたいと思っています。

（脚注）革マル活動家による誤認殺人事件

人生を振り返って

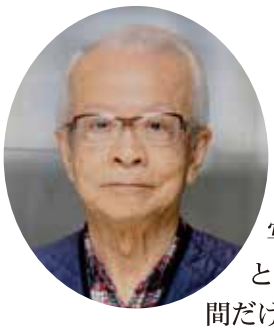
木　原　禎　子（昭36理工、玉川会）

今コロナ禍の中で、私たちは大きな時代の変革期に直面しています。多くの人々が辛い時期を過ごしていますが、私たちは多くの問題点を学び、改革するチャンスを頂いているように感じています。

終戦の年、私は小学校１年生で、その年の始めに奥沢から沼津の叔母の家に疎開しました。7月17日に沼津の大空襲があり、隣家一軒を残して焼け野原となりました。親しくしていた何人もの近所の人が黒焦げの焼死体となり、トタン板を被せられていました。私は人は死ぬものだとその時学び、さらに死ぬために生きているのだと気づき、何とか悔いのない生き方をしたいと願いました。

私の学生時代は、まだ男女差別が大きい時代でした。都立高校時代化学部に属し、とても楽しく充実した学生生活を送っていました。その際キュリー夫人伝を読み、このように純粋に真理を追究する夫婦関係があることを知り、通常の結婚生活には憧れも意味も全く感じていなかった私は、このような人生に憧れました。親に大学に行く事さえ反対されましたが、早稲田では応用物理科（在学中は女性一人）を専攻し、念願だった理化学研究所の研究者として入所することができ、全く男性と同じく学会発表や学会誌への投稿などもさせて頂きました。しかし子供4人の長女という理由で、強引に見合い結婚させられ、一生仕事を続ける約束が、たった40日だったことを最近気づきました。自分を殺し、義務と責任を果たすだけで必死な結婚生活でした。

いろいろな事がありました。でもそれがあったお陰で、今はスピリチュアル関係の翻訳をこの歳でもさせて頂いております。これまで、たま出版から3冊翻訳本を出させて頂いており、全く予想もしなかった人生展開ですが、多くのことを学ばせて頂いた人生だったと、今では感謝の気持ちでいっぱいです。



雪の朝

加　藤　隆　夫（昭34法、さくら会）

1956年のある日に撮った電車の写真である。現在は東急世田谷線として、三軒茶屋と下高井戸までの間だけを細々と運行しているが、当時は「渋谷」から「二子玉川」、さらに「砧」まで通じ「玉電」と呼ばれていた。これは当時の型式の電車である。

撮影場所は、下高井戸方面を三軒茶屋で分岐して二子玉川方面へ一駅目の「玉電中里」という停留所付近で、246線国道の脇からである。当時、渋谷方面から国道246線の道路上を走ってきた「玉電」は、三軒茶屋駅を過ぎてしばらく行くと、国道は真直ぐに走っているにも拘わらず道路の北側の専用軌道に入り、「玉電中里」の駅を過ぎて次の「上馬停留所」近くになると、また国道の路上に戻り走り続けていた。

何故このようなレイアウトになっていたかというと、旧道は道幅も狭く南側に曲がり坂を下り、上馬付近になると北へ坂を上り戻っていた。当時そのような細い道を拡張出来ず、電車は専用軌道で真直ぐ通したと思われる。国道はその後、拡張して真直ぐに開通したと思われる。この旧道は現在も健在で、道路沿いは、ちょっとした商店街となっている。このような事例は、現在の田園都市線用賀駅付近でも見られる。

ところで、写真に戻って、現在の様子はというと、国道は当時と比べようになく大幅に拡張され、上下の車両がひっきりなしに行き交っている。空を見上げれば、高速道路の橋桁が覆い被さり、騒音の坩堝にある。

雪の朝の風情を忍ぶ余地は無い。

詩と共に歩む

渡　邊　那智子(昭36文、玉川会)

長年書き溜めた詩を携えて、私が早大出身の詩人白石かずこ氏に師事したのは、36年前のことである。

「私は命と引き換えに詩を書いています」厳かな第一声にたじろいだ。「センチメンタルは悪いことじゃない。硬質の言葉で活きるのです」ひたと見据える漆黒の瞳の下で私の詩はどんどん短くなった。

それは丁度私が3人の肉親の介護を一身に担うことになる苦闘20年の始動の時期に当たっていた。己が身を自らの言葉で支えなければこの坂を登り切ることが出来ないと直感したのだろう。気の遠くなるまで考え抜いた。意識の果ての空白の中から思いもかけない言葉が聞こえてくる。殆どは意味不明だ。しかしそれらを書き連ねてゆくと自分にとって非常にインパクトのある言葉が繰り返されていることに気付く。

後に分かったことだが、それらはすべて予感と事実を核としていた。

認知症の父との日々は私を常識の外へ連れ出した。

介護や死と直面せざるを得ない老いの道のりにおける一人の人間としての奮闘記録としてお読みいただければと思います。

〈天幕〉　夜が水を汲む
〈ヒメネズミ〉　太陽の胸が明かした
〈黄昏〉　これは昨日の夜なのか
〈解脱〉　母牛が咲いている
〈星屑〉　いまわの猫が置いていった
〈夜明け〉　炎の果ての河なのか
〈末世〉　胡蝶爆睡す
〈エキソダス〉　涙よ光れ命を越えて
〈春雪〉　ミカエルの素足を浸す
〈汐留〉　月下の登り坂

稲門会と私

松　尾　　守　(昭35文、さくら会、食べ歩き)

平成21年(2009年)10月18日稲門祭の日。卒業後50年、最後のホームカミングデーの招待状が来たので、懐かしいクラスメートとの再会を期待して、久しぶりにキャンパスを訪れた。

この日、セレモニーは体育館で行われ、評論家の大前研一氏が卒業生を代表して講演を行った。

さて、講演が終わって外に出て、あたりを見回したが、顔を見知ったクラスメートは一人もいない。このまま帰るのも口惜しいと思っていると、案内の男性が「大隈庭園に屋台が出ていますよ」と教えてくれた。言われるままに行ってみると、世田谷稲門会の表示のあるテントが見えた。そこで、ビールと焼き鳥を求め椅子に座って食べていると、一人の紳士が近づいてきて「世田谷稲門会の入会申込書」を手渡してくれた。これが稲門会との出会いであった。

初めての参加は翌年、平成22年(2010年)1月30日、駒場エミナースでの新春懇親会であった。

それから2月7日の「さくら会」懇親会、3月14日、御茶ノ水駅に集合して初めてのウォーキング、4月18日の芝公園「うかい」での食べ歩き会、5月17日の桜新町集会所での句会と、矢継ぎ早の活動に没頭していった。

入会して10年以上経過した今、改めて考えてみると、これらの世田谷稲門会のブロック会・趣味の会での継続的な活動が、ともすれば怠惰な生活に陥りがちな老年期の私に、どれほどの新鮮な活力を与えてくれたことであろう。感謝の気持ちでいっぱいである。

コロナ禍により稲門会の活動はこの1年ほとんど途絶えているが、それでも俳句部会のさくら句会は、富塚兆弥さん、津島晃一さんのご尽力により通信句会という苦肉の策で続けられている。他の部会でもコロナ禍の終息の兆しを待って、一斉に活動を開始するであろう。稲門会を通じて培った先輩・後輩、また多くの校友との楽しい交流が、一日も早く再開することを切に願っている。

コロナ禍で得たもの

大　谷　政　明（平２社学、千歳会）

昨年早々に世田谷稲門会に入会させていただき、新年から当会に新人としてデビューさせて頂こうと思った矢先、新型コロナの洗礼を受ける事となってしまいました。しばらく自粛生活が続き、仕事、外出、会合、ゴルフコンペ等のイベントでの外部との接触が一切できなくなってしまいましたが、そんな時に数年前から妻と共通の趣味として始めたゴルフがその時間を救ってくれました。もともと妻はあまりスポーツをしないタイプでしたが、女子プロゴルフのブームも追風となりゴルフに興味を持つようになっていました。私は仕事の付合いでのゴルフはありましたが、スコア100前後での接待ゴルフ専門でうまくなろうという気持ちは全くありませんでした。

そんな中でコロナ自粛で時間ができるようになると、比較的３密になりにくいという事で、妻と一緒にゴルフをやろうという事になり、TV番組やネットでゴルフの勉強をするようになりました。こんなにも妻と同じ時間を共有した事はありませんでしたので、コロナ様さまです。TVやネットでの独学だけでは中々上達しませんでしたが、お互いに意見を出し合い、時には衝突しながらも練習場やコース実践を重ねているうちに、数ヶ月後には私は90前後、妻は100前後にまで上達していました。私は早稲田に在学中はトランポリン部に所属して毎日のように記念会堂で練習していました。高校まで野球部だったのでジャンルが違うハンディはありましたが、全日本選手権Aクラスに出場し、卒業後も会社に勤めながら続けて全日本選手権シンクロナイズドの部で奇跡的に３位という成績をもらう程頑張ったという自負がありました。

その若い頃の元気を取戻すためにも、ゴルフも上達できる様に頑張ってみようという気持ちを取り戻しました。

世田谷稲門会ゴルフ部会ではプライベートラウンドを開催頂き、皆様とお会いできた事感謝しております。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

学生のころ

一　色　淳　子（昭56政経、西北会）

赤堤で生まれ、育ったのは松原です。子どもの頃は茅葺屋根の家が残り空き地もあちらこちらに見られる牧歌的な風景が広がっていた記憶があります。それも今は様変わりしました。

1977年に政経学部政治学科に入学。女子はクラスで4人、学科全体では60余人だったと思います。真面目を絵にかいたような方々ばかりで、話題は本や新聞に載っているような硬い内容がほとんどでした。ゼミは国際関係の大畠先生、サークルは天文同好会。6号館屋上に部室があり、いつもそこで何をやっていたのか、勉強はせずに会報などを作っていました（ガリ版刷りで！もちろん真面目に天体観測をしているグループもいました）。語学授業でしか顔を合わせない学部クラスの結びつきは弱く人間関係が希薄でしたが、サークルでは多くの友人ができ、野辺山（長野県）にある山小屋で過ごす時間も貴重な思い出となっています。山小屋といっても先輩方が自ら建てられたもので、冬は石油ストーブを点けてもすぐ近くのバケツの水が凍るほどの寒風が吹きこむ隙間だらけの空間でした。それでも楽しかった。

学生時代の記憶は多くの断片的な場面としても強く残っています。構内での四季の移ろい、光きらめく中の木々の緑、様々な友人たちの表情、学部の図書館、早稲田祭での出来事など。どうしたものか、授業風景はその後、非常に恵まれた学習環境にいたことを振り返ると時間をもっと有効に使うことができたのではと今となっては少し残念に思います。でも思い出すのは多くの面で充実した学生生活。取り戻すことのできない新鮮で感性豊かな時代の幸せな瞬間でした。

学生当時、「不確実性の時代」（ガルブレイス著）がベストセラーになっていました。現在混沌とした社会情勢の中にありますが、将来が見通せない不確実な時代は回帰したのかもしれません。感染症の過去にも学びつつ一日でも早くこの状況が終息することを願わずにはいられません。

学生時代の思い出　サマーコンサート

西　川　正　敏（昭44商、けやき会）

昨年の夏、名古屋市在住の１年後輩から１冊のパンフレットが郵送されてきました。同封されていた手紙には、「終活で書類を整理していたら見つかったので送付します。」とありました。昭和42年8月12日に名古屋市の中電ビルホールで、幹事長として開催したサマーコンサートの16ページの小冊子でした。その時約千枚販売したチケットもあり、「ハイソサエティーオーケストラ リサイタル」と「ゲスト早大フォークソングループ」とあります。

53年も前の事なので、ほとんど記憶になかったのですが、16ページの冊子を読みながら、様々のことがつい先日のように思い出されました。早稲田時代の４年間、勉強は試験の前に少ししただけでしたが、友人・先輩・先生に恵まれました。50人ほどいた商学部の級友の中で、気の合った仲間5人とはつい最近まで毎年１泊旅行をしてきました。

中野の下宿でご一緒した文学部の先輩とは現在も何かあれば相談に何っています。

このコンサートを主催したのは稲門杏葉会（東海高校早稲田会）で、当時の会員は約200名、会長は商学部長の中島正信先生にお願いしていました。

4年生の時のゼミが先生の「国際資本移動論」でした。講義で先生が就職試験にはこんな問題が出るよと黒板に書かれました。なんと、受験した会社の英語の試験の第一問目にそれがありました。冊子にはハイソのプロフィールとして「私たちは今年で11年目を迎えたまだ若いクラブです。」とあります。でも現在は64年目ですね。 冊子の最後のページには32名の幹事の名前があります。一緒に開催を準備し、昼と夜2回、500人の会場を一杯にしてほっとした仲間達に改めて感謝しています。早稲田時代の楽しかった思い出の一つです。

株式市場が意味するもの

大　山　毅　彦（昭59商、玉川会、スポーツ観戦部会）

コロナ禍で日常が激変し、スポーツ観戦部会も残念ながら観戦中止になりました。

激変の中でも特に驚きに値するのが、株式市場の暴落とその後の暴落を超える暴騰ではないでしょうか。日本の株式市場は、30年半ぶりに日経平均３万円回復などと、トップニュースになったりしています。

私は1984年に国内大手証券会社に入社し、外資系投資銀行、外資系プライベートバンクなど、一貫して金融市場に関わってきましたので、日本の株式市場について振り返ってみたいと思います。

日経平均が史上最高値38,915円を付けたのは、1989年12月末で、その時のNYダウは2,753ドルです。現在は2月19日の31,647ドルが高値で、NYの時価総額は約4,850兆円（日本の7倍）。30年間で時価総額、NYダウ共に約12倍になりました。NYと比較し、東証1部の時価総額は30年間で2割増でしかありません。NY市場のGAFAM（グーグル、アップル、フェイスブック、アマゾン、マイクロソフト）の時価総額は833兆円であり、東証全体の時価総額を上回ります。このことからも、この30年、日本がいかに低迷したか、よく理解できます。

今回のコロナ禍での株式市場の驚異の上昇は、各国政府の1400兆円とも推測される政策対応（金融、財政）による過剰流動性が主な要因ですが、より正確には、未曾有の金融緩和による将来の貨幣価値の暴落を予想し、それに見合った株式市場の上昇ともいえるでしょうか。バブル後の調整に30年も要し、ようやくスタートラインに立ったかのような日本の株式市場の今後に期待したいと思っています。

コロナ禍で始まったセミリタイア生活

宮　田　　大（昭61政経、きぬた会）

2019年、4年後にサラリーマン卒業を控えた56歳の私（現在58歳）は、一足早く会社人生に区切りをつけ、これまでの経験や資格を活かした経営支援の仕事を「ボチボチ」やっていこうと計画し、独立準備を進めていた。

企業内中小企業診断士として経営支援をする機会が折々にありながらも、組織内で本業を抱える身では、支援も中途半端で終わることが多く、節を屈する場面に何度も遭遇した。

そして2020年初め、予定通り晴れてセミリタイア生活を始めた矢先に、このコロナ禍である。

COVID-19のニュースが流れはじめた当初、情報も少なく、10年ごとに定期的に出現し猛威を振るう感染症の一種かと思われたこのやっかいな新型ウィルスは、瞬く間に世界中に拡大し、それまでの我々の生活を大きく揺るがし一変させることになった。

経験のない不透明な状況が嵐のように世の中をおおう中の船出となったものの、コンサルタント事務所のホームページを開設し、WEB広告なども地道にトライしていくうちには、有り難くも少しずつお客様がついてきて下さった。また金融機関の紹介などのご縁もあって様々な業種の経営者の方々のお話を伺っていくうちには、セミリタイアというスタンス以上を求められる事態に直面することとなった。

コロナ以前の当たり前が通用せず、経営にも働き方にも変革が求められる難しい状況にあって、従業員を抱え会社という船の舵を取る経営者の多くは、平時以上に真剣勝負である。変化するニーズに合わせた顧客開拓、マーケティング、ビジネスモデル転換、事業承継、人材育成といった多岐にわたる切迫した課題をストレートにぶつけてくる。当方もコンサルタントとして精一杯の知恵を出す。

在宅ワークやオンラインミーティングが普通となったこの一年余り、昨日までお互い知ることも無かった様々な業種の経営者の方々と、PC画面越しに出会い共に戦略を練る日々が続いている。

当初思い描いていた「プライベートで適度に息抜きをしながらボチボチ仕事もするセミリタイア生活」とはやや趣きが異なったものの、コンサルタント業は時間や場所の制約もなく、幅広い分野の様々な人々と出会い向き合える仕事の一つと改めて思う。仕事人生の後半に与えられた巡り合わせに感謝している。

人生100年時代と言われる中で、ささやかでも社会のお役に立てることを目標に、自分なりの「ボチボチ」を追求しながら、これからの人生を感謝と共に突き進んで行こうと考えている。

１月出席簿　欠席なしです

ラジオ体操に救われて

磯　﨑　　哲（昭44理工、西北会、食べ歩き）

昨年を振り返れば、1月は「ハワイ」、2月は「沖縄」に出かけたまでは良かったのですが、御多分にもれず3月末頃から「自粛生活」が始まり、運動不足による体力低下は深刻なものになりました。このままでは大変なことになると感じていた10月のある日、近くで毎朝ラジオ体操をしているグループがあることを知りました。小田急線の地下化により、下北沢駅付近に一時的に生まれた空き地を活用して始まったとのことでした。毎朝8:30から30分間「世田谷ラジオ体操連盟」の「大棒京子先生」の指導で行われていました。10月5日、妻と共に参加してみると、年令も職業もさまざまな20～30名の方が楽しそうに身体を動かしていました。30分はあっという間に過ぎていき、心地よい汗と爽快感が残りました。

ラジオ体操といえば小学校の頃以来の体験でしたが、ラジオ体操第1、第2、みんなの体操と進み、ストレッチやスクワットも加えて、効果的に組み合わされていることにも感心しました。

そもそもラジオ体操の歴史は古く、昭和天皇即位の記念事業として1928年（昭和3年）11月1日7時00分に「東京中央放送局」で放送を開始したとされています。また「みんなの体操」は1999年（平成11年）に一般公募などにより制定され、高齢者に負担が少ないように運動量を軽くし座位でも行えるように工夫されています。

ラジオ体操を始めた昨年10月以来、ほぼ毎日完璧に出席し、正月や雨の日は「Ｚoom」を活用して自宅の室内から参加しています。今や完全に毎日のルーティンワークになり、ラジオ体操のない一日は考えられません。この結果、持病の腰痛も軽快化し、足がつることもなくなりました。食欲も回復して、体調はまさに快調そのものになり、血液の循環が良くなったためか、夜も熟睡出来るようになりました。

コロナ禍の中でまさに「ラジオ体操に命を救われた」と言っても過言ではありません。

コロナの収束も近づいていることを確信しつつ、ラジオ体操に励みながら、ワクチン注射を待っている今日この頃です。

大棒先生と私

蕗の薹と私の少年時代

青　木　明　彦（昭41理工、キャロット会）

私は兵庫県神戸市に生まれましたが、戦争が激しくなり、すぐに栃木県の楡木町（今は合併されて鹿沼市）に疎開しました。終戦までこの地で育ちましたが、太田飛行場の近くなので空襲警報と山野の緑と雪景色の記憶がかすかに残っているだけです。

小学校から中学２年生まで栃木県の間々田町（今は合併されて小山市）で、野原や田んぼの溜池・灌漑用水そして思川（利根川の支流）で霞網を使って野鳥を捕まえ、釣り竿を振り回し、投網や置網で魚を狙って走り回っていました。

川には鮎や鯉、沼には鰻・鮒・鯰、田んぼには泥鰌やタニシやイナゴ、竹藪には孟宗竹、土手や畦道には土筆、セリ、ヨモギ、そして蕗の薹…が取り放題、ただし畑から失敬して河原で冷やして食べたスイカや瓜は私に内緒で父親が弁償していたことを後で知りました。

世間ではあの食糧難時代はたいへんだったと言いますが 私にとっては決してつらい思い出ではなく自然の中では工夫すれば何でも手に入る楽しい思い出ばかりです。筍は高校時代の友人が埼玉県の東松山に住んでいて、コロナ騒動までは4月の最終休日に中学・高校時代の仲間30人から40人が集まり、裏の竹山から首を出したばかりの孟宗筍で大パーティをやっていました。年に三回東京で開催される大相撲も私はちゃんこ鍋でなく駒形で泥鰌三昧です。妻の実家の山口県岩国市に帰る時も、錦帯橋の下で獲れる鮎を塩焼きにして頭から（正確にはお腹から）かぶりつき、何も残しません。居酒屋や小料理屋でイナゴがあると真っ先に飛びつきます。

前置きが長くなりましたが12年前に世田谷に越してきて最初の正月の15日、民藝館の玄関の石畳の間から蕗の薹が一本だけ顔を出しているのを見つけ、心を躍らせました。どうせ誰かに踏まれてしまうのだからと勝手に解釈し家に持ち帰り、さっそく天ぷらにして熱いうちに有難く頂くと、一瞬のうちに懐かしい少年時代が甦りました。

翌日、ラジオ体操の帰りに北沢川緑道を注意して歩いてみると、蕗の薹が4個、私に手招きしているではありませんか。それから毎年1月15日を「我が家の蕗の薹記念日」として2月下旬まで堪能して今日に至っています。居酒屋やスーパーのものとは格段に違うとラジオ体操仲間も驚嘆しています。緑道には禁止されている場所はもちろん駄目ですが夏みかん・イチジクも。区は違いますが駒場東大梅園の梅の実、西郷山公園の筍など私の周囲は少年時代を思い出す素晴らしい環境に恵まれています。ウォーキングで知った神社仏閣名所旧跡も多数あります。これからも積極的に発見に努めたいと思います。

校友会年会費納入のお願い

皆様のご協力により、世田谷稲門会は早稲田大学校友会年会費納入率が高く、補助金も多く支給されています。

ほとんどの方が毎年納入いただいていると思いますが、失念して未納の方は納入をよろしくお願いいたします。

世田谷稲門会事務局：戸田　昇

――ブロック会・特別部会・趣味の部会だより――

新型コロナウィルス感染拡大防止策のため各ブロック会、特別部会、部会ともに活動を大幅に自粛しており、ご報告する内容がほぼ無いという実情です。一部のブロック会・部会を除いては「報告事項無し」となります。ご了承ください。

ブロック会

けやき会　忘年懇親会

けやき会は10月3日(土)１回目のオンライン秋季懇親会を実施し好評を得ましたので、続いて12月5日(土)に忘年懇親会(参加者21名)を開催することになりました。ケヤキ会世話人の花澤隆さん(昭49)にZoom(ビデオ用ソフト)を設定していただき準備が出来ました。

14時にまず各人が用意した飲み物とつまみで乾杯し、その後1人ごとに近況報告を行いましたが、やはりコロナによって遠くに行くことや人と大勢で集まれないため巣籠りの状態で自宅待機中との報告が多かったです。一方オンライン懇親会で皆さんの顔が見られたことや声が聞こえることで各人が元気になられたように感じられました。その後観談し余興として井上文さん(昭45)指導でクイズが行われ、終了近くで「紺碧の空」「都の西北」をオンラインにて合唱し16時30分終了となりました。

前回同様今回も気軽に参加出来、楽しく貴重な会でした。　(石橋　暉彦／記)

きぬた会

4月1日(木)に砧公園にて開催予定していた4ブロック会共催の「花見会」は中止とします。2年続けての中止となり、とても残念です。早く飲み会が開催できるよう祈ります。

8月29日(日)に予定している世田谷稲門会の納涼会は当会が担当します。銀座ライオンビルの6階「クラシックホール」で開催予定です。詳細については7月発行予定の会報77号に掲載します。皆さんのご参加をお待ちしています。

(榎並　俊一／記)

その他のブロック会　報告事項無し

特別部会

地域サポート活動部会

地域サポート活動部会ではリモート会議で令和2年度の寄付先を検討し、昨年と同様に下記の2団体にそれぞれ10万円ずつの寄付を行いました。

① キッズファム財団(重い病気を持つ子どもと家族を支える財団)」
② 世田谷区児童養護施設退所者等奨学資金

なお、会員の皆様からお預かりした募金残額は、寄付分を差引き、3月の期末で合計 445,939円となっております。

(林　馨／記)

青年部会、レディースクラブ　報告事項無し

趣味の部会

ゴルフ部会

昨年はコロナ禍で4回のコンペが全て中止となり、10月と12月の２回はプライベートでの開催としました。今年もまだコロナが収まらないため、3/23(火)に予定していた中津川CCはプライベートラウンドとして6組(24名)の参加で開催しました。

今後の予定は下記です。

5月25日(火)　第16回稲門会・三田会懇親コンペ(桜ヶ丘CC)　⇒5月末までの校友会活動自粛を受けて秋の開催(10/26(火))に延期
6月　9日(水)　第107回　武蔵野GC(八王子)
10月14日(木)　第108回　都留CC
11月10日(水)　第12回校友会コンペ、久邇CC　(世田谷稲門会として1～2チーム)
12月　7日(火)　第109回　桜ヶ丘CC

(詳細については関係者へメールにてお知らせします)　(榎並　俊一／記)

俳句部会

令和２年12月～令和3年2月までは通信部会でした。兼題は12月が「師走」、1月が「熱燗」でした。高得点句を掲載します。　(富塚　兆彌／記)

冬鴎舞ひて人なき赤レンガ　勝　(田中　勝)
凍雲やコロナ疲れの夕陽落つ　恵那　(榎並俊一)
めでたさやアクリル越しの春の礼　牧羊　(津島晃一)
古ボタン小箱にあふれ一葉忌　まもる　(松尾　守)
冬茜明かぬ夜なしと染めており　利水　(江原利次)
ラグビーの日向と陰のグラウンド　兆弥　(富塚兆彌)
加湿器の蒸気真直や雪催　雪子　(家入雪子)
寒暁のラジオの楽はオラトリオ　広　(矢後勝洋)
街師走払へば払へるツケ一枚　二丁目(暮田忠雄)

その他の部会　報告事項無し

世田谷稲門会　会員異動状況　令和3年　2月28日現在（正会員416名、準会員36名）

〔新入正会員〕

氏名	卒年	学部	郵便番号	住所	電話	ブロック
松居　秀行	昭45	理工	182-0022	調布市国領町8-2-9 ライフタウン国領2-1117	03-6356-0700	きぬた

〔退会会員〕

氏名	卒年	学部	備考	ブロック
森　　昌治	昭38	商	2020/11/22逝去	キャロット
有利　純太郎	昭22	商	2020/8/19逝去	きぬた
武田　一成	昭28	文		
杉田　齊志	昭35	商	2020/6/1逝去	きぬた
小山　俊次	昭33	商	2020/12/9逝去	きぬた
草谷　好孝	昭29	商	2020/11/16逝去	さくら
佐々　睦子	昭43	商		さくら
大山　　学	昭39	法		きぬた

〔退会準会員〕

正会員名	準会員名	備考	ブロック
篠崎　章子	篠崎　眞	2020/12/30逝去	千歳
薄井　好雄	薄井　裕子		千歳
故寺澤　隆夫	寺澤　宣子		きぬた

〔住所変更・訂正〕

氏名	卒年	学部	郵便番号	住所	電話	ブロック
米窪　義健	昭42	理工	158-0094	世田谷区玉川2丁目15番15-204	090-2136-8272	玉川

〔その他変更・修正〕

氏名	卒年	学部	修正箇所			
			メールアドレス	電話	FAX	ブロック
柴田　　昇	昭29	商	fishing-shibata@n06.itscom.net			さくら

事務局からのお願い；
会員みなさまの入退会はもとより、転居の場合は郵便局への届け出だけではなく、世田谷稲門会事務局にも忘れずにご連絡ください。また、電話番号、e-mailアドレス、ブロック会の変更、名簿の修正事項も事務局まで必ずご連絡ください。

事務局担当　篠崎　章子　　電話　03-3305-4650
e-mail；shinoshoko@gmail.com

編集後記

2020年1月に初めて新型コロナウイルス感染者が日本で確認され、家族や親しい人同士が気軽に触れ合える日常は失われました。まさか1年以上たった今でも終息が見えないなんて誰が想像し得たでしょう。世田谷稲門会でも皆で出かけたり集まったりすることが制限されてしまい、楽しみがずいぶん減ってしまったことは残念でなりません。そのような状況のなか会員の皆さんが挫けることなくアレコレいろいろなアイディアや行動力で人生をより豊かに過ごされていることがわかり、さすがエンジの仲間だと思いました。

先日86歳になられた草笛光子さんと仕事でお会いする機会があり、ご高齢の方は人一倍不自由な生活を送っていらっしゃるのではと申し上げたところ、「戦時中に比べたら全然平気よ。だって電車やバスは動いているしスーパーにはたくさん食べ物が溢れているもの。」と思いがけない言葉が返ってきました。さすが往年の大女優。私ごときが想像し得ない数々の修羅場を潜りぬけてこられたのでしょう。物事に動じない肝の据わった姿がますます魅力的でした。

コロナの怖いところは症状が重症化してしまうことはもちろんですが、真の恐ろしさは人と人とのコミュニケーションが奪われてしまい、それによって心が弱ってしまうことです。まだまだ先が見えませんが明けない夜はないと信じて、今ひとときの窮屈な生活を滅多にない貴重な経験として気持ちを切り替えて、前を向いて日々過ごして参りましょう。

（秋山　多美子／記）